JSiSE Research Report
vol.37,no.7(2023-3)

勉強無効感尺度の開発に向けた因子構造と妥当性の検討

白澤秀剛[*1]，岩屋裕美[*2]
*1 東海大学, *2 川崎市立看護大学

Factor Structure Validation for the development of Study Invalidity Scale

Hidetaka SHIRASAWA[*1], Hiromi IWAYA[*1]
*1 Tokai University, *2 Kawasaki City College of Nursing

遠隔授業において，教員から見て不適切と思われる行動をおこなっている学生が少なからず存在しており，不適切学習行動の頻度を抑制するためには学習に対する自己決定性（自律性）を高めることが有効であることを示唆する結果を得ている．一方で，日本社会の中で「大学の勉強は役に立たない」とする言説が存在しており，これが学習に対する自己決定性（自律性）を低下させる要因になっている可能性が示唆される.「大学の勉強は役に立たない」という言説をどの程度大学生が信じているのかを定量的に調査した結果はほとんどなく，今回，大学での勉強が役に立たないと感じている割合を測定する尺度作成を試みた．調査結果から「大学の勉強は役に立たない」と考えている学生が一定数存在することが明らかになり，また尺度得点と動機づけや不適切学習行動頻度との関連を示唆する結果を得た.

キーワード: 学習行動，自己効力感，遠隔授業

1. はじめに

我々のこれまでの調査で，遠隔授業において，教員から見て不適切と思われる行動を行なっている学生が少なからず存在することが明らかになった(1)．不適切学習を行う頻度が低い群と高い群の２群に分けて動機づけ尺度との関連を調べたところ，高群は同一化的調整と内発的調整が優位に低いことがわかった. これは、学習することの価値の内在化が低いほど不適切学習行動は起こりやすく、価値が内在化されるほど不適切学習行動は抑制されることを示唆している.

自己決定理論の中の有機的統合理論では，外発的動機づけを自律性の低い順に「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化調整」「統合的調整」の４つの区分が一軸上に並ぶものとしている(2). この中の「同一化的調整」は「自分にとって重要なことだから勉強する」など，学習活動を行う価値を認め，自分のものとして受け入れている状態の動機づけである.

一方，近年の大学入学者の多様化に伴い，学生の学習に対する否定的価値観に着目した研究が見られ，学習「しない」動機づけに内的要因として否定的な学習価値観が関わるようだとの報告がある(3)．動機づけ理論における期待価値モデルでは,「期待」と「価値」の積が動機づけのあり方を規定するとされ，価値を感じているほどその実現や獲得に向かっていこうとする動機づけが高まる一方で，価値を一切感じていなければ動機づけは生じない(4)．学習への接近行動を促すプラスの価値だけではなく、学習からの回避行動を動機づけるマイナスの価値があるとされており，学習に対する否定的な価値は，学習に対する回避行動を促す可能性がある。このことは，不適切学習行動頻度と同一化的調整との関連とも整合性がある.

近年の若者はネットから情報を入手することが多く，ネットの言説が価値観に影響を与えることが想定される．google 検索において「大学は意味ない」のヒット件数が約 2 億件,「大学無駄」のヒット件数が約 2400 万件となっている(2022 年 2 月調べ)．これらは本当に無駄と書かれているものと，実際には無駄ではないと

書かれているものが入り混じっているが,「大学の勉強は役に立たない」という言説が半ば常識のように言われていることを示唆している. そこで, 本研究では「大学の勉強は役に立たない」と感じる度合い，言い換えると，大学で勉強しても成長が見込めないと感じる，または大学で勉強しても将来に役立つ効果が得られないと感じる度合いを測定する質問項目を作成し，勉強無効感尺度の作成を試みた．勉強無効感尺度項目の調査の際，同時に学習動機づけ尺度及び不適切学習行動頻度も調査した．勉強無効感尺度の因子分析結果における因子構造の検証及び，学習動機づけや不適切学習行動頻度との関連を調べることで，勉強無効感という概念が成立しうるのかどうかについて検討した結果について述べる.

2. 調査

2.1 質問項目

「大学の勉強が役に立たない」と感じる理由として，勉強による自己効力感が不足している場合と，勉強に対する自己効力感が不足している不安を埋め合わせるための心理的方略として勉強は役に立たないと思っていたいという場合があると仮定した．表１に示すように６つの要素に対して無効感に該当する質問項目を各２～３項目ずつ作成した．質問項目はランダムに並べ替えを行い，回答は「あてはまらない」から「当てはまる」までの５件法とした.

表１　学習無効感尺度質問項目

分類	番号	項目	m±SD
勉強量	Q1	勉強は多くやればよいというものではないと思う	3.4±1.2
	Q2	勉強は最低限やっておけば十分だと思う	2.5±1.1
	Q3	勉強よりも大事なことに時間を使うべきだと思う	3.0±1.0
成長	Q4	勉強をしても頭の悪さは変わらないと思う	2.5±1.2
	Q5	苦手分野は勉強しても成績は上昇しないと思う	2.2±1.0
	Q6	勉強するのは元々頭のいい人だと思う	2.1±1.1
方略	Q7	理解できないものは勉強方法を工夫しても理解できないと思う	2.3±1.1
	Q8	勉強方法を変えても成績は変わらないと思う	2.2±0.9
短期的評価	Q9	勉強を一生懸命やっても報われない	2.7±1.1
	Q10	勉強ができても良いことはない	1.8±1.0
	Q11	勉強で評価されるのは学校の中だけだと思う	2.6±1.2
長期的評価	Q12	勉強ができることとえらいことは関係がない	3.6±1.1
	Q13	人間を勉強で評価するのは間違いだと思う	3.3±1.2
社会	Q14	勉強以外にも大切なことはたくさんある	4.3±0.9
	Q15	勉強は社会では役に立たない	2.0±1.1

2.2 調査方法

文系・理系・体育系など多くの学部を含む総合大学Aの情報系と語学系の自由選択科目履修者に対して，成績や単位取得には影響のないことを説明した上で，任意での回答協力者を募集した. 調査はWebフォームで行い, 回答欄末尾に研究利用を拒否する項目を設け，この項目にチェックを入れた回答についてはデータを削除した.

表１の質問項目と同時に，岡田らの大学生用学習動機づけ尺度 [5]，不適切学習行動頻度[1]の質問項目を加えて調査を行った.

調査は 2022 年度春学期及び秋学期の学期中盤に行い，有効回答数 106 件を得た．回答者の学年は１年次～６年次となっており，３年次生の回答がやや多く，５，６年次生は計５件であった.

2.3 倫理承認

本調査は東海大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認（承認番号 22105）を得て実施した.

3. 結果

単純集計を行い質問項目の天井効果・床効果の有無について検証した．１項目において天井効果，２項目において床効果が見られたが，質問内容的に妥当性があると判断し，項目を残したまま因子分析を行った．続いて，尺度得点と動機づけ尺度との相関，不適切学

習頻度との相関について検証を行った．

3.1　単純集計結果

表１に示したように，Q14 には天井効果が，Q10，Q15 には床効果が見られた．Q14 を当てはまると感じる割合が多いこと，Q10，Q15 に当てはまらないと感じる割合が少ないことには一定の妥当性があり，また標準偏差も 0.9～1.1 と他の項目と同程度のバラツキがあるため，項目を削除せずに因子分析を行うこととした．

「大学の勉強は役に立たない」に対して，直接的なワーディングの項目 Q9 と Q15 の回答分布ヒストグラムを図１と図２にそれぞれ示す．Q9「勉強を一生懸命にやっても報われない」に「ややあてはまる」「あてはまる」と回答した割合の合計は 20%，Q15「勉強は社会では役立たない」に「ややあてはまる」「あてはまる」に回答した割合の合計は 10%との結果を得た．この結果から「大学の勉強は役に立たない」と感じている学生が一定数存在することが確認できた．

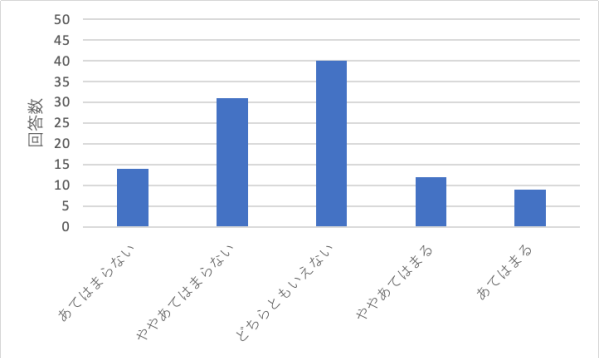

図１　Q9「勉強を一生懸命やっても報われない」の回答分布

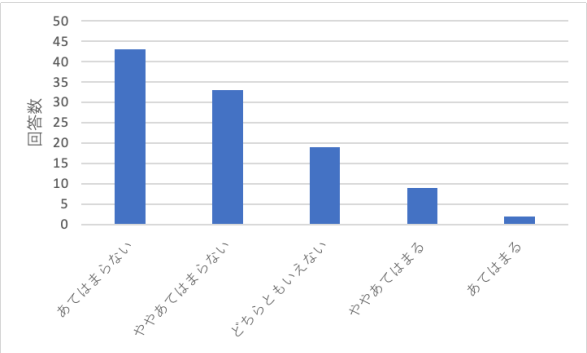

図２　Q15「勉強は社会では役に立たない」の回答分布

3.2　因子分析結果

全 15 項目で最尤法，プロマックス回転による因子分析を行った．図３に示すスクリープロットにより，因子数を２因子と決定した．因子パターン行列を表３に示す．クロンバックのα係数は第１因子が 0.831，第２因子が 0.734 であり，内的整合性も十分高いことを確認した．

第１因子は Q8「勉強方法を変えても成績は変わらないと思う」や Q15「勉強は社会では役に立たない」など，勉強に対する無力感及び無力感に対する埋め合わせ戦略による認識を示しているため「勉強無力感因子」と名付けた．第２因子は Q3「勉強よりも大事なことに時間を使うべきだと思う」や Q13「人間を勉強で評価するのは間違いだと思う」など，勉強に絶対的な価値を置かないことを示しているため「勉強価値の相対化因子」と名付けた．

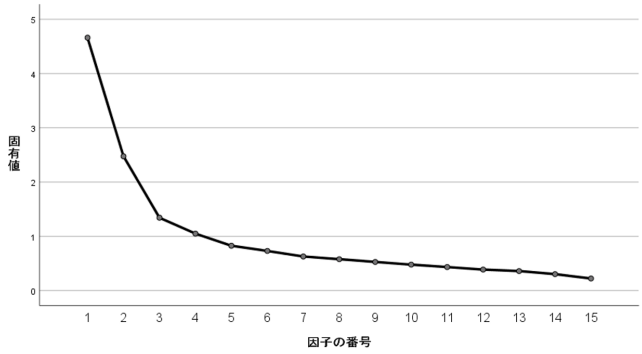

図３　スクリープロット

表３　パターン行列

項目番号	因子１	因子２
Q8	0.734	-0.055
Q6	0.675	0.084
Q15	0.662	0.047
Q7	0.655	0.020
Q4	0.632	-0.099
Q5	0.622	-0.035
Q10	0.595	-0.104
Q9	0.328	0.217
Q3	0.199	0.710
Q13	-0.054	0.662
Q12	-0.149	0.633
Q14	-0.524	0.559
Q11	0.322	0.460
Q2	0.394	0.439
Q1	-0.047	0.360

3.3 尺度得点と動機づけ尺度との相関

下位尺度得点及び尺度全体の得点と動機づけ尺度の下位尺度得点との相関を表４に示す．因子１と内発的調整，同一化的調整に弱い負の相関が見られ，外的調整と正の相関が見られる．一方，因子２とはいずれの動機づけとの相関も見られなかった．

表 4 尺度得点と動機づけとの相関

動機づけ	因子 1	因子 2	全因子
内発的	-0.304**	0.040	-0.182
同一化的	-0.341**	-0.034	-0.250**
取り入れ的	0.073	0.040	0.072
外的	0.516**	0.105	0.408**

** p<.01

3.4 尺度得点と不適切学習頻度との相関

遠隔授業不適切学習行動の中でも，遠隔授業に特徴的な不適切学習行動を抜き出して比較を行った．因子１と不適切学習行動とはいずれも正の相関が見られ，因子２とは相関が見られなかった．

表５ 比較した不適切学習行動

行動番号	内容
(1)	ライブ授業にアクセスはしているが視聴していない（寝る・離席するなど）
(2)	ライブ授業にアクセスはしているが，その授業とは関係のない作業をしている（別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など）
(3)	オンデマンド動画の再生はするが，視聴はしない（寝る・離席するなど）
(4)	オンデマンド動画の再生をしながら，その授業とは関係のない作業をしている（別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など）
(5)	ライブ授業では冒頭だけアクセスして途中で退室する
(6)	課題実施にライブ授業録画やオンデマンド動画の視聴が必要であっても，見ずに課題を実施する

表６ 尺度得点と不適切学習行動との相関

不適切学習	因子 1	因子 2	全因子
(1)	0.490**	-0.062	0.295**
(2)	0.337**	0.068	0.266**
(3)	0.467**	0.054	0.346**
(4)	0.467**	0.124	0.282**
(5)	0.349**	-0.024	0.222*
(6)	0.332**	-0.084	0.177

* p<.05 ** p<.01

4. 考察

「大学の勉強は役に立たない」との言説をある程度信じている，またはそのように感じている学生の割合が少なくとも１割から２割程度は存在することが今回の調査から明らかになった．また，役に立たないという概念が自分は勉強しても無駄と感じる無効感と，勉強の価値は絶対ではないと感じる，ある意味，勉強に対する健全な評価の２つによって構成されていることがわかった．累積寄与率は 47.574%とやや低いが，勉強無効感という概念はある程度の妥当性を持って成立していると言える．

第１因子である勉強無力感因子は内発的調整や同一化的調整と負の相関があり，学習に対する価値の内在化を阻害する要因になっていることが示唆される．第 1 因子は不適切学習行動とも正の相関があることから，勉強無力感が高いと適切な学習行動を維持することができずに，不適切学習行動を行なってしまうと考えられる．加えて，第１因子の質問項目の言葉は，勉強をしないことに対する言い訳の言葉，すなわち心理的な埋め合わせ戦略として作用して，より一層不適切学習行動を促進させてしまうことが危惧される．

先行研究で教員が価値を伝達することによって学習行動に影響を与えるとの報告がある[6]．すなわち，遠隔授業で学生の効果的な学習を促すには，システム面での使いやすさなどを含めた遠隔学習環境の向上のみならず，学習に入る前に学習無効感尺度による調査を行なって状況を把握し，学習に入る前に「大学の勉強は役に立たない」という認識を変化させるような介入が重要と言える．

5. 今後の課題

「大学の勉強は役に立たない」と感じている学生が一定数存在することは確認できたが，今回は1大学の有効回答数106件での分析のため，この結果をもって大学生全体に対する傾向を述べることはできない．大学生全体としての傾向を知るには複数大学での調査を踏まえた尺度開発が必要と考える．また，学年による差異や変化などについて検討するためには，調査件数を増やしたり，追跡調査を実施したりするなどの必要がある．併せて，大学の勉強の価値を変化させるような介入が不適切学習行動の減少に繋がるかについて，今後の実践及び調査が必要といえる．

参 考 文 献

(1) 白澤秀剛，岩屋裕美:“遠隔授業不適切学習行動と学習動機づけとの関係分析”，教育システム情報学会誌，Vol.40, No.1, pp.77-81 (2023)

(2) 櫻井茂男: “夢や目標を持って生きよう！（自己決定理論）”，モティベーションをまなぶ12の理論，金剛出版，2012

(3) 松岡陽子:“大学生の学習回避と否定的学習価値観”，日本パーソナリティ心理学会発表論文集, No.18, pp.74-75 (2009)

(4) 鹿毛雅治: “学習意欲の理論―動機づけの教育心理学―”．金子書房，東京 (2013)

(5) 岡田涼，中谷素之: “動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響 -自己決定理論の枠組みから-”，教育心理学研究，第54巻，第1号, pp.1-11 (2006)

(6) 解良優基，中谷素之: “認知された課題価値の教授と生徒の課題価値評定，および学習行動との関連”，日本教育工学会論文誌, Vol.38, No.1, pp.61−71 (2014)